

平成9年度  
(1997)  
第37回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌清田

【 専門委員長 寸評 】

男子団体戦は前評判通り、札幌藻岩高校が6年連続18回目の優勝を果たした。ジュニア経験を持つ、杉村・松永・安達・橋場の4人は、他校選手よりズバ抜けた技量を持ち、全国大会でも活躍することが期待された。昨年のエース吉川が抜けたものの、団体戦の力量は、橋場を加えて昨年並の布陣となった。

2年連続準優勝の札幌旭丘高等学校は、ジュニア上がりの選手が一人もいない中でのもので、立派なものであった。第3位に入った室蘭大谷高校、札幌北高校も善戦した。特に、ジュニア選手中心の札幌北高校は秋季全道大会での活躍も期待される。

女子団体戦は札幌清田高校に軍配が上がった。全道2連覇を目指した札幌稲雲高校は無念の涙を飲んだ。また、函館勢の活躍が目立ち、第3位に函館東高校と函館白百合学園高校が入ったのは特筆すべきことであった。

男子個人戦は、札幌藻岩高校の完勝に終わった。ダブルスは札幌地区と同じ結果で、シングルスでの力量がそのまま反映せず、1年、3年ペアの橋場・安達組が優勝した。準優勝の杉村・松永組がシングルの力量を發揮できないものとなった。ダブルスのベスト8位に札幌勢が6組、函館勢が2組となり、全道の勢力分布を表している。シングルスはベスト4位はすべて、札幌藻岩高校が独占した。ベスト4位を決める試合(安達7-6乾)、(松永7-6中島)は藻岩の精神力を示したものとなった。

女子個人戦ダブルスは優勝が瓶子・松浦組(札幌清田)で順当なところである。団体戦で惜敗した札幌稲雲の高橋・大沢組は準優勝で全国大会出場を決めた。第3位に入った足寄高校の塚田・鈴木組は地方勢の力量アップを如実に物語っている。シングルスはジュニア上がりの内田里美(札幌西)が優勝し、瓶子(札幌清田)の3冠を阻止した。

男女共ベスト4位以内はすべてジュニア上がりとなり、ジュニアで活躍したものが上位を占め、高校に入ってからテニスを始めた者は勝てない時代となった。

【全国大会】

男子団体戦では、札幌藻岩高校が1回戦不戦勝、2回戦は宮崎県代表の土佐原には圧勝

し、第3回戦でも実力のある東京代表の早稲田実業に快勝した。準々決勝は昨年度優勝の千葉県代表の渋谷学園幕張高校となり、ダブルスでは対等な戦いをしたが、シングルスでは、全国のトップクラスの寺地、辻に歯が立たなかったが、ベスト8入りは立派であった。この数年札幌藻岩高校は、ベスト4、ベスト8という好成績で、全国の強豪校に名を連ねている。

女子団体戦の札幌清田高校は、1回戦不戦勝、2回戦は鹿児島代表の鳳凰と当たり、接戦をものにした。第3回戦は名門中の名門、大阪代表の四天王高校と当たり、完敗を喫した。シングルスストップの瓶子は2-6で負けたものの内容のある試合であった。

男子個人戦ダブルスは第1代表の安達・橋場(札幌藻岩)は第1回戦で完勝したものの、2回戦はタイブレークの接戦を落とした。第2代表の杉村・松永(札幌藻岩)は1・2回戦とも圧勝し、3回戦では第8シードの福岡県の柳川高校ペアを6-4でくださった。更に、準々決勝では第1シードの寺地・辻組を2-6、6-2、6-2で倒し、準決勝に駒を進めた。これまで第1シードに勝った北海道ペアはなく、まさに快挙といえる。準決勝は団体戦で勝っている早稲田実業高校ペアとの戦いとなり、第1セットを5-7で落としたものの第2セットを6-2で取りし、ファイナルセットとなった。前半の劣勢を覆して5-5まで追上げたものの、ミスが重なって5-7と落とし、第3位となった。北海道のレベルの高さを遺憾なく示してくれたと思う。シングルスでは、松永(札幌藻岩)が3回戦、杉村(札幌藻岩)が4回戦まで進む健闘を見せた。

女子個人戦ダブルスは瓶子・松浦(札幌清田)が3回戦まで進み、ベスト16に入った。シングルスでは、高橋(札幌稲雲)内田(札幌西)が2回戦まで駒を進めたものの、シングルスでの全国レベルの高さを肌で感じた。

( 専門委員長 横山 俊之 )

## 優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

我々、藻岩高等学校男子硬式テニス部は、8年連続18回目の優勝を飾ることができました。これは部員の努力だけではなく、ここまでの伝統を築き上げてきた先輩の方々、ご協力や激励して下さった協会役員の方々、そして緒方監督、溝渕コーチのご指導のおかげと、心から感謝しております。

日頃から全国優勝を合言葉にして練習してきたチームにとって北海道大会では、ポイントをとす事すら許されない中、一人一人がその責任を果たした事は、大変好ましく思います。

しかし、個人戦に入り、様子は一転しました。団体戦優勝から気が抜けたのか、相手選手に押される場面が多くなってきました。特にシングルス準々決勝。チームの2番手、2年生の松永が札幌南戦からリードを許し、2-5で相手にマッチポイントを与えてしまいました。本人も必死ですが、回りの応援も今までに無い力の入れ様でした。1ポイント1ポイント手に汗握り、声援がもはや悲鳴の様になっていくのを感じました。結局2度目のマッチポイントをしので大逆転を収め、7-で勝つことができたのです。私はこの時ほ

ど、チームの力を感じた事はありませんでした。松永一人の勝利というよりもむしろ、チーム力の勝利でした。その結果、個人戦でも出場者全員が、全国大会へと進むことができました。本当に嬉しく思いました。

( 札幌藻岩高校 主将 杉村 太蔵 )

## 優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

.....やるべき事はやってきた。あとはそれをさせるか、出せないか.....

冷たい苦小牧の空の下、私達の優勝に対する情熱は暑いものでした。今年こそは！という思いの中、させる力を出し切った私達は、昨年果たすことのできなかった全道優勝を、ついに果たすことが出来ました。初回戦から決勝まで、皆一つになり、常にながむしゃらで一生懸命でした。決勝の相手は支部予選と同じくライバルの札幌稲雲高校。両校とも気合は十分でした。でも、すでにその時、私達の相手は稲雲ではなく自分自身でした。そして、向かう所はたった一つ.....全道優勝でした。

今のチームでの全道優勝は、これまでになかったので、本当に一からのチャレンジ精神で臨みました。すると皆、120%の頑張りを発揮する事が出来ました。その結果として「優勝」という大きな喜びを手にすることが出来たのです。やれば出来る、何事も。そう思えた瞬間でもありました。一からテニスを教えて下さった緒方先生、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。テニスを通じて、たくさんの素晴らしい事を学んだ私達は、テニスに出会えてよかった。清田高校でテニスが出来てよかったと、これからはずっとずっと、思い続けるでしょう。

( 札幌清田高校 主将 松浦 はるみ )

全国高校総体 (第87回全国高等学校庭球選手権大会) 京都

8月2日～8日

京都市小畑川中央公園テニスコート

京都市西院公園テニスコート

男子	個人戦シングルス	優勝	寺地 貴宏 (渋谷教育学園幕張)
	ダブルス	第3位	杉村 太蔵・松永 一紀 (札幌藻岩)
女子	個人戦シングルス	優勝	伊東千佐世 (静岡市立)

平成9年3月

# 第19回全国選抜高校テニス大会 参加報告

札幌稲雲高等学校 佐藤振一郎 佐々木雄介

( 札幌支部顧問会議への報告書 )

昨年に続いて2度目の出場となった選抜大会。稲雲高校は初戦の2回戦で佐賀代表の龍谷高校と対戦し、1-4で敗退という残念な結果で日程を終えた。遠征全般の反省を兼ね、今回の全国大会出場についてご報告申し上げたい。

1 3勝97敗 ( 勝率 0.03 )

北九州入りに先立ち、私たちは兵庫県の2つの学校に立ち寄って練習試合を行った。3月18日は沢松奈生子の母校である夙川学院。翌19日は伊達公子の園田学園。ともに何度も全国制覇を成し遂げている全国トップレベルのチームである。

この2校とは、昨年も同じ日程で練習試合をお願いし、ダブルス・シングルスを取り混ぜて55試合を行っている。結果は全敗。手も足も出ない散々な有様だった。予想していたこととはいえ、トップレベルの凄さを思い知らされ、尾羽うち枯らしての九州入りだったことを思い出す。しかし、夙川・園田から頂いたお土産は屈辱感だけでではなかった。それは“本番で物怖じしないくそ度胸”……だって、あれ以上凄いトコなんかないんだから……おかげで、初めての選抜大会では2勝してベスト16という望外の好成績をおさめることができた。

1年を経て、今年も3月の選抜遠征が巡ってきた。「大会前に自信を無くさせることになりはしないか」「もっと手頃な相手を探してはどうか」あれこれと思い悩んだあげく、やはり今年も夙川・園田まで“2匹目のどじょう”を探しに行く身のほど知らずを決行することにしたのである。

結論から言うと、今年もサンドバッグ……ボコボコにされてしまった。初日は夙川学院。5ヶ月ぶりのアウトドアということは言い訳にもならないが、23戦して全敗。今大会のトップシードの実力をまざまざと見せつけられることになった。帰り際、「来年は、ぜひ男子も連れていらして下さい」という関根先生の言葉は温かいご厚意以外の何ものでもないのだけれど、顧問2人は有り難いやら、情けないやら、恥ずかしいやらで、返答に窮してしまった。生徒たちもすっかり元気をなくしてしまい、帰りの電車ではぐったりの放心状態。もっとも、夕食に連れて行った展望レストランのお好み焼きで、現金この上ない彼女たちの元気は簡単に復活を遂げた。

翌日の園田学園も強かった。昨年同様、光國先生のご厚意で中学生まで相手をしてくれた。外のコートに慣れてきたこともあって、2廻り目の試合ぐらいから少しずつ光明が見え始めていた。まずは2番登録の大沢が園田の6番手に大善戦して、一時は5-3のマッ

チポイントまで追い詰めたのである。しかしここからが強かった。結局タイブレークまで持ち込まれ・・・簡単には勝たせてくれないものである。続いて頑張ったのが3番手の新2年生・西森。対戦相手は登録外の2年生だった。終始リードを保って、一旦は6-6に追いつかれたものの、タイブレークで初勝利を手にしたのである。思えば、昨年から夙川・園田の胸を借りて、81試合目の金星であった。この日、園田学園では22試合を行って、シングルスで西森が1勝。ダブルスでは高橋・大沢組と西森山崎組がそれぞれ1勝・・・なんと3勝したのである。

顧問もいささか上機嫌になっていた夜のミーティングの訓示は以下のようなもの。「たった3発のラッキーパンチが当たったに過ぎない。しかし3勝の意味はとても大きい。貴の花の強さを想像することもできなかった幕下の力士と、貴の花の凄さを身をもって知った幕内の一番弱い力士との差ぐらい大きな違いだ。これを自信にして、北九州では思い切り頑張ろうじゃないか」・・・しかし、貴の花や曙にしてみれば、お話にならないほど弱い相手であることに違いはないのである。

## 2 審判

北海道の女子の実力が決して低いものでないことは、昨年、山梨インターハイのおりにも実感してご報告申し上げた。しかし、未だ全国レベルに追いつけないでいる要素は他にもたくさんある。ここでは一点だけ、生徒による審判について感じたことを申し述べることにしたい。

今大会の審判員は、各コートに主審と副審の2名。そのすべてを会場近隣の高校のテニス部員諸君が受け持っていた。「インターハイと比べて劣っている」などの声がないわけでもないが、私の目からは実に素晴らしい審判だった。何よりも大きな声で発せられるコールが試合に緊張感を与えていた。審判員が十分にルールに通じていて、フットフォールトやナットアップ、タッチなどのコールが適正に自信ある態度で行われ、副審のミスジャッジに対する主審のオーバールールについても素早く手際よく・・・要するに、北海道大会の審判は足下にも及ばないレベルだった。顧みて、我がチームの練習での審判の何ともお粗末なこと。日頃の指導の怠慢を痛感させられた次第である。

## 3 2回戦1-4敗退

大会初日、稲雲高校は石川の星稜高校を倒して勝ち上がってきた佐賀の龍谷高校と2回戦で対戦し、1-4で敗退した。詳細は以下の通りである。なお、龍谷高校は、3回戦で埼玉の茗溪学園を破ってベスト8入りし、続く準々決勝で長野の松商学園に敗れている。

2回戦 (対・龍谷)		
D 1	高橋直子・大沢早紀子	3-6
D 2	山崎奈央・西森由佳	3-6
S 1	高橋直子	6-3
S 2	大沢早紀子	2-6
S 3	西森由佳	4-6

